

まえがき

かつての私はどこに行くときにも釣竿をもっていった。釣が目的ではない旅のときでも私の鞆の中には竿が入っていて、用事が終るとその近くにヤマメやイワナの暮らす川を探した。

いろいろな村の宿に泊った。二十五年以上前に私が書いた本に『山里の釣から』（一九八〇年）があるけれど、私はがむしやらに魚を釣るより、里という人が暮らすところを流れる川で竿を伸ばし、山と畑と家が織りなす景色をみながら釣りをするのが好きだった。「溪流釣り」ではなく「山里の釣り」が私の釣りだったのである。夜になると近くに宿を探し、川で知り合った村人に家へと誘われた。畑の横に座って村人の話を聞いていたこともあった。最近では鞆に釣竿が入ることは少なくなってしまったが、それは私が群馬県の山村、上野村で東京と同じくらいの日数を暮らすようになったからである。上野村も一九七〇年代に入った頃に私がはじめて釣りに訪れた村である。

山村に滞在していると、かつてはキツネにだまされたという話をよく聞いた。それは

あまりにもたくさんあって、ありふれた話といってもよいほどであった。キツネだけではない。タヌキにも、ムジナにも、イタチにさえ人間たちはだまされていた。そういう話がたえず発生していたのである。

ところがよく聞いてみると、それはいずれも一九六五年（昭和四十年）以前の話だった。一九六五年以降は、あれほどあったキツネにだまされたという話が、日本の社会から発生しなくなってしまうのである。それも全国ほぼ一斉に、である。

一体なぜ。本書はこの問いからはじまる。なぜ一九六五年をもってキツネにだまされたという物語が発生しなくなってしまうのか。一九六五年に、日本の社会の何が変わったのか。私は次第にこの謎を解いてみたいと思うようになった。

本書は私自身の企画としては、「歴史哲学序説」という副題のもとに書かれている。それは、なぜキツネにだまされなくなったのかという問いを繰り返すうちに、キツネにだまされつづけた自然と人間の歴史、里の歴史、自然とコミュニケーションをとりながら暮らした民衆の精神史などと、向き合わなければならなくなったからである。そのことをとおして一般的な歴史学からは「みえない歴史」をつかみなおす必要性に迫られた。歴史とは何かを、私は歴史哲学の課題として考察しなおす必要性を感じていた。

そんな問題意識をもちながら書かれたのが本書である。キツネにだまされたという物語を生みだしつづけた歴史を、なぜ私たちは失なったのか。私たちが暮らしている歴史世界とは何なのか。

本書が「私たちの現在」を考える一助になれば幸いである。